

## 『王叔和脈訣』の書誌について

水溜 亮一

日本鍼灸研究会

『王叔和脈訣』は、5言もしくは7言の歌訣形式を基本として書かれた脈学の専門書である。

本書の著者を高陽生とする説は、南宋の『三因方』巻一・脈経序の「六朝有高陽生者。剽窃作歌訣。劉元賓從而解之。遂使雪曲庇。稀巴歌和衆。経文溺于覆甕。正道翳于詖辞。良可嘆息。」に始まる。高陽生について、王世相（『瀕湖脈学』付録『脈訣攷證』所引）は五代の人とするが、いづれも根拠を明らかにしない。また高陽生の名は正史その他の史料に見えない。

本書は隋唐の史志には見えず、ようやく『宋史』芸文志に「王叔和脈訣一卷」と著録された。一方、北宋の熙寧・元祐年間には本書の最初の注解書である劉元賓『通真子補註王叔和脈訣』（1076）が成立している。これらをふまえて、多紀元胤は『医籍考』で「其辞理鄙俗。決非成於六朝時者。其称五代高陽生。近是。然亦未見何拠。」と述べているが、妥当な見解である。ちなみに『難経集註』二難の楊氏の注に、現伝本に未見の「王叔和脈訣云。三部之位。輒相去一寸。合為三寸。」の一節がある。よって本書の異本の存在や、伝承過程での脱文も考えられる。

本書は、王叔和への托名や、体系的な脈状の分類である七表八裏九道などを理由に否定的に評価されることが多い。『宋史』以前に本書を初めて著録した南宋の『郡齋讀書志』でも「脈訣一卷。右題曰王叔和撰。皆歌訣鄙浅之言。後人依託者。然最行於世。」とするが、識者の批判にも関わらず、南宋代には広く流布していたこともわかる。実際、本書が宋代から明代前半までの脈学に与えた影響や意義は大きい。たとえば南宋の施発は『察病指南』の脈状分類に七表八裏九道を採用し、元の戴起宗の『脈訣刊誤』も、すでに人口に膾炙しつつも批判に晒されていた本書を、医経を基に注解を加えることで再評価する目的があったと思われる。また『脈訣刊誤』、『勿聴子俗解脈訣大全』、『図註脈訣弁真』が、明から清代にかけて繰り返し重刊されていることも、その影響の大きさを窺わせる。宋代以降の脈学の研究には、本書を再評価し、脈学の歴史の中に正しく位置づける必要がある。よって、先ず本書の基本的な書誌の調査研究を行った。

本書の現伝本には、無注本と注解書がある。管見の及ぶ限りでは、無注本には次の4種類があり、いずれも合刊本である。①明刊『医要集覽』所収本／中国科学院国家科学図書館、中国国家図書館、上海図書館、日本の武田科学振興財団杏雨書屋（2本）に所蔵。別に中国国家図書館に抄本が所蔵。②明刊『体仁彙編』所収本／中国国家図書館所蔵。③明刊『医書八種』所収本／本邦の国立公文書館内閣文庫所蔵。④『医書七種』所収本／杏雨書屋所蔵。

主要な注解書には、北宋の劉元賓『通真子補註王叔和脈訣』三卷、金の張元素『潔古老人註王叔和脈訣』十卷、元の戴起宗『脈訣刊誤』二卷、同じく元代成立の撰者未詳『纂図方論脈訣集成』四卷、明の熊宗立『勿聴子俗解脈訣大全』六卷、明の張世賢『図註脈訣弁真』四卷などがあるが、ここでは本書の最も古い経文を含むと考えられる2書について述べる。

『通真子補註王叔和脈訣』三卷は、4本が現存する。国立公文書館内閣文庫に『経籍訪古志』著録の明・成化五年刊本（翠巖精舎刻本）と古写本（書名「新刊註王叔和脈訣」江戸医学館旧蔵）が、蓬左文庫に刊年未詳の朝鮮刊本が、台湾国立故宮博物院に多紀元堅旧蔵の古写本（書名「新刊註王叔和脈訣」）が所蔵される。

『潔古老人註王叔和脈訣』十卷は、日本にのみ3本が現存する。宮内庁書陵部に『経籍訪古志』が著録する元・至元十九年序刊本と元刊本が、杏雨書屋に古写本が（残三卷）収められている。

なお、無注本の多くは宋以降の注解書の本文を用いて再編されたもので、古態を遺しているとは言い難い。無注本と注解書の本文の異同は、今後の検討課題とする。